

『土佐日記』『馬のはなむけ』

1、はじめに

・作者：**紀貫之**まきのつらゆき

・成立：**平安時代**（935年ごろ）〔平安時代は794～1185年ごろ〕

・ジャンル：**日記文学**

・別タイトル：「門出」など

・『土佐日記』の特徴：仮名文で書かれた最古の日記文学。女性に仮託して記している。（貫

之自身を第三者の視点で書く。）

土佐守の任期が終わり、京への帰路、934年12月21日～935年2月16日

までの55日間を記録する。

1

・要約

男性の書くという日記を女の私もしてみようと思っ。

12月21日の夜八時ごろ仮の宿へ出発する。

紀貫之は、国司の仕事の引継ぎを終え、夜は多くの人と大騒ぎをした。

22日に和泉の国までの安全を祈願し、船旅ではあるが「馬のはなむけ」をしてもいい。

多くの人には不思議なことに潮海のほとりでふざけあっている。

2. 2、本文(注付)

男もすなる^{☆1}日記^{※1}というものを、女^{※2}もこころみむとて、するなり^{☆2}。

その年^{※3}の十二月^{※4}の二十日あまり一日の日の、戌の時^{※5}に、門出す。そのよし^{☆3}、いささかにもに書きしへ。

ある人^{※6}、県の四年五年^{※7}果てて、例のことども^{※8}みなし終えて、解由^{※9}など取りて、

住む館^{たち}^{※10}より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、^{※11}送りす。年

ろよく比べつる人々^{※12}なむ^{☆4}、別れ難く思ひて^{☆5}、日しきりに^{☆6}とかく^{☆7}つつの

しる^{☆8}うちだ、夜更けぬ。

二十二日に、和泉の国^{※13}までと、平らかに願立つ^{☆9}。藤原とまぎな^{※14}、船路なれど

馬のはなむけす^{※15}。上中下、酔ひ飽きて、潮海のほとりにてあざれ^{※16}命

く。

3、【補足・注】

- ※1「日記」…本来日記は
大阪府南部
- ※7「県の四年五年」…国司
の任期は4・5年
- ※14「藤原ときざね」…伝
「男性」が公的なことや備
忘として「漢文体」で書かれ
※8「例のことども」…慣例
未詳
- ていた。それを「女性」の体
通りの、国司交代の引継ぎ
※15「馬のはなむけ」…送
別の宴。馬の鼻を旅路に向
で「仮名文」で書いたのが
業務
- 『土佐日記』である。
※9「解由」…解由状。新任
け、安全を祈る。
- ※2「女」…紀貫之が女性の
者が発行する、前任者の業
◎紀貫之はこれから船旅な
視点に立って書いた。
務が過失なく行われたこと
のに、陸路を行く「馬」とい
※3「その年」…任期を終
を証明する公文書。
う言葉を使うおもしろさ。
- えた934年
※10「住む館」…国司の官
※16「あざれ」…終止形
「あぞる」で「腐る」「ぶぞ
※4「しはす」…「師走」と
舎。
ける」の意味。
- の表記もある
※11「知る知らぬ」…「知
◎「塩（＝塩）」は防腐効果
があるのに、その人たち
- ※5「戌の時」…午後八時ご
っている人も、知らない人
◎「あざれ合」っている（ぶ
ろ
も」
※12「比べつる人々」…仲
だけあっている＝腐ってい
- ※6「ある人」…紀貫之自
※1「比べつる人々」…仲
身。「女性」の立場から見
良くしてきた人たち
- と「ある人」にあたる。
※13「和泉の国」…現在の
る、）というおもしろさ。

【重要単語・文法】

- ☆1「なる」…伝聞の助動詞「なり」連体形
- ☆2「なり」…断定の助動詞「なり」終止形

◎この二つの「なり」の識別は頻出。

「すなる日記」の「す」が終止形↓
サ変の終止形につく「なり」は
伝聞・推定
「するなり」の「する」が連体形↓
サ変の連体形につく「なり」は
断定

となり、連体形「思う」になるが、接続助詞「て」が「思ふ」「つひつひるのど」「思ひて」となり、結びが流れている。

☆6「日じきり」…一日中

☆7「とかく」…あれこれ

☆8「のしる」…大騒ぎする。通常、「な

む」の結びの語となり、結びの語としての連体形「のしる」になるが、「うち」を修飾するので連体修飾語としての連体形になり、結びが流れている。

☆3「よじ」…この日は「よきよし」ほか「理

由・由緒・風情・方法」など

☆4「なむ」…係助詞「なむ」。通常は係り

結びで結びの語) ☆5「思ひて」「か☆8」の

のしる」に係り、結びの語を連体形にする。

☆5「思ひて」…通常「なむ」の結びの語

◎このような結びが流れることを「結びの**流れ・結びの消滅・結びの消去**」という。

☆9「立つ」…下二段活用動詞。自動詞「立

つ」は四段活用・他動詞「立つ」は下二段活

用。ここは「願」を立つ「なので他動詞。

4、現代語訳

男もするといつ日記といつものを、女である私もしてみようと思つて、するのである。

ある年(934年)の12月21日の、午後八時ごろに、出発する。そのいきさつを(=間のことを)、すこし物(日記の紙)に書きつける。

ある人(他人である女性に仮託した紀貫之から見た紀貫之自身)が、国司の4・5年の任期を終えて、所定の引継ぎ業務などをすべてし終えて、(後任者より)解由状などをもらつて、官舎から出て、船に乗ることになっている所へ移動する。あの人この人、知っている人知らない人が(紀貫之)を見送る。長年仲良くしてきた人々は、別れ難く思つて、一日中あれこれして大騒ぎしているうちに夜が更けてしまった。

22日、和泉の国まで(安全に)いけますように(と)、平穩を願う。藤原ちとまざねは、(紀貫之の旅路は馬に乗らない)船路であるけれど「馬のはなむけ」をする。身分の上の人も真ん中の人も下の人もみんな酔っぱらつて、とても不思議なことに、(防腐効果のある)潮海(=塩海)のほとりまでぶざけあつてゐる(=腐つてゐる)。

5. 2、本文と現代語訳

男もするという日記というものを、女である私もしてみようと思って、するのである。

男もする ☆1 日記 ※1 と 女もする ☆2 日記 ※2

ある年（934年）の12月21日の、午後八時ごろに、仮の宿へ出発する。そのいきさつを（＝間のこと）を、

その年 ※3 の十二月 ※4 の二十日 ※5 まり一日 ※6 の、戌の時 ※7 に、門出す。そのよじ ※8、すこし物（日記の紙）に書きつける。

うしろかにもに書きまじく。

ある人（他人である女性に仮託した紀貫之から見た紀貫之自身）が、国司の4・5年の任期を終えて、所定の引継ぎ業務などをすべてし終えて、（後任者より）解由状などをもらって、

ある人 ※6、 県の四年五年 ※7 果てて、例のことども ※8 みなし終えて、解由 ※9 など取りつて、

官舎から出て、船に乗ることになっている所へ移動する。あの人この人、知っている人知らない人が（紀貫之）を見送る。長年

住む館 ※10 より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、 ※11 送りす。年

仲良くしてきた人々は、別れ難く思っ、一日中あれこれして大騒ぎしている

るよく比べつる人々 ※12 なむ ☆4、 別れ難く思ひて ☆5、 日しきりて ☆6 とか ☆7 つついののうちに夜が更けてしまった。

しる ☆8。うちだに、夜更けぬ。

22日、和泉の国まで（安全にいきますように）と、平穩を願う。藤原ちときざねは、（紀貫之の旅路は馬に乗らない）船路であるけれど「馬

はつかあまのふつか 二十二日、和泉の国 ※13 まで、平らかに願立し ☆9。藤原ちときざね ※14、船路なれど馬

のはなむけ」をする。身分の上の人も真ん中の人も下の人もみんな酔っぱらって、とても不思議なことに、（防腐効果のある）潮海（＝塩海）のほとりでふぶきあっている（＝腐っている）。

のほなむけ ※15。上中、酔ひ飽き、潮海のほとり、命入

り。

6、品詞分解

単語	品詞等
男	名詞
も	係助詞
す	動詞・サ変・終止形
なる	助動詞・伝聞・連体形
日記	名詞
と	格助詞
いふ	動詞・四段・連体形
もの	名詞
を、	格助詞
女	名詞
も	係助詞
し	動詞・サ変・連用形
て	接続助詞
み	動詞・上一段・未然形
む	助動詞・意志・終止形
と	格助詞
て、	接続助詞
する	動詞・サ変・連体形

なり。	助動詞・断定・終止形
それ	代名詞
の	格助詞
年	名詞
の、	格助詞
十二月	名詞
の	格助詞
二十日あまり一日	名詞
の	格助詞
日	名詞
の	格助詞
戌	名詞
の	格助詞
時	名詞
に、	格助詞
門出す。	動詞・サ変・終止形
そ	代名詞
の	格助詞
よし、	名詞
いささかに	形容動詞・ナリ・連用形

もの	名詞
に	格助詞
書きつく。	動詞・下二段・終止形
ある	連体詞
人、	名詞
県	名詞
の	格助詞
四年	名詞
五年	名詞
果て	動詞・下二段・連用形
て、	接続助詞
例	名詞
の	格助詞
事ども	名詞
みな	副詞
し終え	動詞・下二段・連用形
て、	接続助詞
解由	名詞
など	副助詞
取り	動詞・四段・連用形

て、	接続助詞
住む	動詞・四段・連体形
館	名詞
より	格助詞
出で	動詞・下二段・連用形
て、	接続助詞
船	名詞
に	格助詞
乗る	動詞・四段・終止形
べき	助動詞・当然・連体形
所	名詞
へ	格助詞
渡る。	動詞・四段・終止形
かれ	代名詞
これ、	代名詞
知る	動詞・四段・連体形
知ら	動詞・四段・未然形
ぬ、	助動詞・打消・連体形
送り	名詞
す。	動詞・サ変・終止形

年ごろ	名詞
よく	形容詞・ク活用・連用形
比べ	動詞・下二段・連用形
つる	助動詞・完了・連体形
人々	名詞
なむ、	係助詞（係）
別れ難く	形容詞・ク活用・連用形
思ひ	動詞・四段・連用形（流）
て、	接続助詞
日	名詞
しきりに	副詞
とかく	副詞
し	動詞・サ変・連用形
つつ、	接続助詞
ののしる	動詞・四段・連体形（流）
うち	名詞
に	格助詞
夜	名詞
更け	動詞・下二段・連用形
ぬ。	助動詞・完了・終止形

二十二日	名詞
に、	格助詞
和泉	名詞
の	格助詞
国	名詞
まで	副助詞
と、	格助詞
平らかに	形容動詞・ナリ・連用形
願	名詞
立つ。	動詞・下二段・終止形
藤原ときざね、	名詞
船路	名詞
なれ	助動詞・断定・已然形
ど	接続助詞
馬のはなむけ	名詞
す。	動詞・サ変・終止形
上	名詞
中	名詞
下、	名詞
酔ひ飽き	動詞・四段・連用形

て、	接続助詞
いと	副詞
あやしく、	形容詞・シク活用・連用形
潮海	名詞
の	格助詞
ほとり	名詞
にて	格助詞
あざれ合へ	動詞・四段・已然形
り。	助動詞・存続・終止形

◎ 船路なれど馬のはなむけす。

紀貫之が四国から京に帰るには、これから船に乗らなければなりません。この旅路を「船路」といいます。船に乗って陸路を行く馬なんて必用ありませんね。けれども「別の宴・饗別」を表す『馬』のはなむけ」という言葉を入れて用いるので、「船路なのに馬」という面白さがあります。「なれど」という逆説の表現が使用されているのがポイントです。

◎ 潮海のほとりにてあぢわれ合入り。

当時は保冷の技術が発達してないので、生ものなどはすぐに腐り、保存ができませんでした。この「腐る」ことを古語では「あぢる(饜る)」といいます。そして腐るのを防ぐために使用されたのが防腐効果のある「塩」なのです。だから塩分が含まれる「潮海(＝塩海)」にも防腐効果があります。

一方、宴会の場ではたくさんのお酒に酔いしています。このことを古語で「あぢる(饜る・狂る)」といいます。「饜る」と同じですね。

このことかかあぢる(饜る・狂る)はものなる潮海の近くで、人々があぢる(饜る)という面白さがあります。

8、参考

- ・教科書 『新編古典B』(2015) 東京書籍
- ・教科書 『精選国語総合』(2013) 三省堂
- ・『教科書ガイド精選国語総合古典編東京書籍版』(2013) あすところ出版
- ・『数研出版教科書ガイド高等学校国語総合国語総合現代文編・古典編』(2013) 学習フ

ックス